

様式(7)

報告番号	<p style="text-align: center;">甲 保</p> <p style="text-align: center;">第 26 号</p> <p style="text-align: center;">乙 保</p>
論文内容要旨	
氏名	笹井知子
題目	診断から初回治療導入期における肺癌患者の不確かさの管理
<p>目的：これから何が起こり，結果がどうなるのか，どのような意味をもつのかといった病気に関連した不確かさは患者にとって重大であり患者自身が通常と考える範囲の身体・心理・社会的な行動がとれるように不確かさを管理することが課題とされている．進行肺癌患者は診断から初回治療導入の期間に強い不確かさが引き起こされることが指摘されている．本研究においてこの期間に患者がどのように不確かさを管理しているのか明らかにした．</p> <p>方法：研究協力者15名に半構造化面接を行い，質的記述的研究手法を用いて分析をした．分析手順として，面接内容を肺癌の診断から治療導入の期間にどのような不確かさを認知し，どのように管理をしたのかに関して語られている箇所を内容ごとに区切った．その内容について似た内容同士をまとめてカテゴリ名をつけた．カテゴリと複数のサブカテゴリを関係づけ，さらにカテゴリ同士の関係を検討した後に，コアカテゴリを抽出し全体を体系化した．</p> <p>結果：コアカテゴリとして《死ぬかもしれない自己の先行きが混迷する中で，生きる道筋を見出す》が抽出された．進行肺癌の診断を受けた対象者は，どれくらい生きられるのか，治療は効果があるのかといった【死が迫っているかもしれない肺癌の治療の先行きが読めない】不確かさを認知していた．また死が迫っているかもしれない自己が存在する意味について【自己が存在していく基盤が揺れ動く】ような混迷状態となっていた．この混迷した不確かさの中で対象者は，進行肺癌の命への影響の見方を変えて死は遠い先のことであり【死を遠ざけて，まだ生きられると挑戦をする】取り組みを行っていた．また生きる挑戦と同時に対象者は治療を受けられる今を良しとして，【がんとつき合いながら生きる甲斐を見出していく】取り組みも行っており，進行肺癌によって死ぬかもしれない混迷状態の中で生きる道筋を見出そうとしていた．</p> <p>考察：進行肺癌の診断後の一次治療は生存期間を延長すると推奨されるが，組織型によっては1年生存率は30%未満，全生存期間の延長は2カ月未満であることも指摘されており，全がん種中で死亡者数第1位と厳しい状況にある．こうした中で，本研究の対象者が死ぬかもしれないという自己の先行きが混迷する中で，生存することに専心しながら，そこに生きる意味を見出していこうとする取り組みは，進行肺癌と診断され初めての治療を導入した患者の不確かさの管理の特徴と考える．</p> <p>結論：看護師は進行肺癌患者の不確かさの管理の様相を理解すると同時に，命を長く延ばしていこうとする活動や生きていく意味を見出そうとする発言から，患者の持つ生きる道筋を見出そうとする力すなわち不確かさの管理の力を洞察して引き出し支えていくことが重要となる．</p>	